

自己評価報告書(最終報告)

報告者

言語系コース(英語)／畑江
美佳

■平成25年度の目標に対する自己点検・評価

I. 学長の定める重点目標

I-1. 教員養成大学教員としての授業実践

中央教育審議会は、「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」答申したが(平成24年8月28日)、その中で「教員を高度専門職業人として明確に位置付ける」と提言している。この答申の考え方を実現するため、教員養成大学に籍を置く教員として、将来、教師を目指す学生に対してどのような授業実践を展開すればよいか。あなたの取り組みを、①授業内容、②授業方法、③成績評価の三つの観点から示してほしい。

1. 目標・計画

①授業内容—学生が将来教員になることを念頭にした授業内容にする。知識に加えてコミュニケーション力や授業実践力をつけるために、具体的な指導案や教材研究、模擬授業などを取り入れる。
②授業方法—座学のみにならないように、ディスカッション形式、特に英語でのプレゼンテーションやディベートを取り入れる。また、私の授業では、毎回自分の考えや意見を持って参加するような予習を課しているため、授業では活発な意見交換が求められる。
③成績評価—レポートやテストのみの評価にならないように、授業での発言、プレゼン、ディベートなどによる評価を加える。

2. 点検・評価

①授業内容においては、英語教員として必要となるであろう英語力、授業実践力、コミュニケーション力がつくように、指導を行った。学生に英語教員としての意識を高く持ってもらうように指導した。
②授業方法においては、とにかく受け身の授業にならないように工夫した。自分の考えを持って授業に積極的に向かうように仕向け、意見を述べ合うようにした。ディスカッションを多く取り入れるのが私の授業方法の特徴である。また、英語でのやりとりなど、日頃から英語のある環境作りを心がけ、学生にも英語で答えてもらうなど、授業方法についても改善を施した。
③成績評価においては、各自が自分の疑問とするものをテーマに、調べてプレゼンテーションをするものを増やし、それを成績評価に取り入れた。
英語教員に必要なグローバルな視野や異文化適応力を養うためにも、在学中の留学を勧め、日常においても留学生と積極的に関わる等のアドバイスをして、実際に学生がその必要性に気づき始めたと思われる。

Ⅱ. 分野別

Ⅱ-1. 教育・学生生活支援

1. 目標・計画

英語コースの学生の英語運用能力の乏しさを実感した24年度だったため、25年度は、学生に自ら働きかけ、または授業で英語を使わせて、教員になったときに英語で授業ができる力をつけさせたい。具体的には以下のような支援をする。

- TOEIC・英検等の指導経験を生かして学生の英語技能の向上を図る。
- 学生の海外留学の推進のために授業その他で啓発し、グローバルな人材の育成を目指す。
- オフィスアワーを活用し、学生の個別指導を強化する。
- 授業やゼミはできるだけ英語で行う。

2. 点検・評価

- ・学生のTOEICや英検に関する指導を行った。また、「教育実践フィールド研究」では、学生を年間10数回附属小学校に連れて行き、実践的な調査をして、そのデータ分析とデータの読み取り方等、研究者として最低限必要となる統計解析の知識についても指導をした。
- ・海外留学の方法や必要性について繰り返し啓発を行った。
- ・学生に対して、オフィスアワーを積極的に活用するように促し、個別に対応することが多くなり、生活の相談や将来の相談等をした。
- ・担任クラス(学部1年生)に関しては、毎月一回必ずミーティングを行い、それぞれの学習や生活について確認をしたり、英語を使ってスピーチをさせたりした。
- ・授業の中で英語を使い、学生が教員になったときの見本となるような授業構成を示した。
- ・学生の授業評価は常に高いと自負している。

Ⅱ-2. 研究

1. 目標・計画

平成19・20年度科研費(基盤C)「小・中連携を意識した小学校英語の実践的研究」(分担者)、平成22~24年度科研費(基盤C)「小学校外国語活動における『絵本』の類型化と運用方法に関する実践的研究」(代表者)として、上越教育大学の石濱博之准教授と組んで継続的に小学校英語教育に関する研究をしてきた。来年度の科研費申請中であるが、今までの研究をさらに発展させるようなテーマを検討したい。具体的には、「他教科との連携による外国語活動」として、本学の国語、算数、音楽などの教員と協力体制とつくり、意味のある場で児童の興味・関心と合致するような外国語活動のカリキュラム編成を研究する予定である。また、文字を使った外国語活動を中学校の外国語科に繋げていくカリキュラムを構築する研究を継続して行う予定である。

2. 点検・評価

附属小学校での「文字を使った外国語活動を中学校に繋げるカリキュラムの構築」を行っており、昨年度の「絵本の活用」に続いて「フォニックス」の研究を継続中である。また、小学校英語教育センターと附属学校との間の「先駆的でかつ持続可能な小学校英語教育プログラム開発」(学長裁量経費)では、今年度、準備段階として、附属小学校の3年生で絵本活用、5、6年生で文字指導の研究を始め、附属学校の校長、教員等とも密に連絡、打ち合わせを持った。また、平成26-28年度科研費(基盤C)「小学校英語教科化に伴う『文字』指導の小・中接続カリキュラムの開発」を申請した。(採用決定)
平成26年3月に、日本大学から博士号(総合社会文化)を授与された。

Ⅱ－3. 大学運営

1. 目標・計画

コロンビア大学の研究者や教員と組んで研究をする予定なので、それが本学のプラスになるような講演会や研究会での発表が可能であればやりたいと思っている。
「教員養成モデルカリキュラムの発展的研究」の小学校英語教育論のテキスト作りによって鳴門教育大学が小学校英語で先導的な役割を担っていることを内外に知らしめたい。
実地教育専門部会の任務を遂行し、徳島や鳴門の小学校の校長先生や英語担当者とのコネクションをつけて、今後の研究や教育に生かしていきたい。

2. 点検・評価

「教員養成モデルカリキュラムの発展的研究」では、「小学校英語教育論」の教科書を完成させた。この教科書は日本でもまだそれほど作られていないため、今後のアピールの仕方次第では、本学の目玉ともなり得るであろう。
今年度、小学校英語教育センター主催のお遍路研修で知り合った愛媛の中学校の先生に本学の大学院を薦めて後日パンフレットを送付したりしたところ、彼女ともう一人の高知の先生を誘ってくれて、2名入学することになった。
科研費での研究にも絡むのだが、コロンビア大ティーチャーズカレッジの研究者やニュージャージー州の日本人学校の英語教員(アメリカ人)との研究は継続しており、平成26年度には学会や講演会等で彼らに來日してもらい、鳴門教育大学とのコネクションを強調するように、今年度は下準備をしている。

Ⅱ－4. 附属学校・社会との連携、国際交流等

1. 目標・計画

附属小学校での英語教育に関してより積極的に関わり、将来教科になったときの手本となるような先進的な外国語活動を目標にカリキュラムを組み立て提案したい。また、24年度に実施した講座等を発展させ、25年度は、教員のための講座だけでなく、「なるっこわくわく教室」に新しい講座、「リトル国際人を目指して外国の文化を学ぼう」を開設し、地域に貢献していきたい。具体的には以下のような活動をする。国費外国人留学生を担当するので、その指導と他の日本人学生との交流にも積極的に関わりたい。

- フィールド研究で附属小学校との連携を図り、効果的な指導法や教材の開発などで貢献する。
- 小学校英語教育センター員として、お遍路型研修の講師、教員のためのワークショップの講師を務める。
- 教育支援講師、公開講座、なるっこわくわく教室、こどもサポーター研修会の講師を務める。

2. 点検・評価

附属小学校には毎週のように通い、英語の教員たちと授業の改善や授業の進め方について話し合ったり、授業をしたりした。
小学校英語教育センターのお遍路研修等の講師は、徳島県以外にも、愛媛、高知、大阪、山口からの依頼があり、小学校英語のワークショップ講師、また、大学の公開講座、こどもサポーター研修会、なるっこわくわく教室等、多数の地域貢献をしたと自負している。また、本学の留学生に声をかけ、附属小学校での外国語活動に数回来てもらい、授業に加わってもらったり、附属小の家庭科の授業で味噌汁作りをしたときに、留学生に参加してもらい、附属小及び留学生の学校訪問経験を多くすることに貢献した。

Ⅲ. 本学への総合的貢献(特記事項)

特記事項としては、私の場合、小学校英語の教科化が決定して以来、ますます外での仕事が多くなってきており、「小学校英語」と言えば鳴門教育大学である！と全国で認識してもらえるように、今年度も教育・研究・地域貢献の3本柱に常に力を注いできた。この努力が報われるのは、来年度か再来年度であろうが、今後も加速して尽力する気持ちである。